

『視聴覚教育』一九六一年一〇月（日本映画教育協会）

視聴覚教育賞の審査を終えて

日本映画教育協会評議員
国立教育研究所員

矢口 新

今年は最高賞を設けないことにした。正直のところそういう主張をした人々の中で私は最も強い一人であった。審査員の中には、奨励の意味もあるから、最高賞を出して、将来に期待するのによいではないかという意見もあった。それも一つの考え方であるが、私は嘗々たる過去一〇年の努力に対して、これは立派な教育改善の姿であると何人でも認められるものに対してこそ最高賞が与えられるべきであると思つたので、あえて、強く主張した。

過去一〇年の努力といったが、私は教育のことはやはりそれだけの努力がいるし、年月がかかるものだと思つている。ちよつとの思いつき位でできるものではない。何も一〇年にこだわるわけではないが、視聴覚教育というのもそういうけたの仕事だと思つのである。一〇年営みつつけるには、理想がなくてはならぬ。地域なり学校なりの人々が一つの理想に向つて協力する所に立派なものが出来あがるのである。またそれだけ人々を動かす理想はあくまで教育の本道にのつているものでなくてはならぬ。それはいうまでもなく人を真実の姿において教育しようとする近代教育におけるリアリズムの精神である。

私は奈良県のへき地のライブラリー運動や、鳥取県倉吉市の小学校

で一〇年にわたる営みを尊いものだと思つた。東京の世田谷区や南山小学校の一〇年にわたる営みもまた珍重すべきものである。しかし私はそれらの営みに対して、きびしすぎるかも知れないが、もう一つ最後の仕上げを要求したい気がする。ただライブラリーの形成にとどまらず、ただ視聴覚教材の利用にとどまらず、それを通じて、現代教育のなやみを解く姿を見せてほしい。今度最後の候補にのぼつたものはみなそれが出来るのである。もう一頑張りである。

社会教育の部門においてもこのことは同様だと考えている。われわれの社会のもつさまざまな問題が、視聴覚教材の利用を通じて解かれて行く姿こそ、われわれの願うものである。これも長い年月を必要とするであろう。しかし農村やへき地の公民館などを中心とした諸々の営みは何れもそういう方向にむいていて、たのもしく思つた。

職能部門の札幌鉄道教習所は、伝統もあり立派なもので、最高賞としてもよいと私は思つている。ただ一つだけでは、最高というのは多少難があつた。残念だと思つが、仕方のないことであろう。